

特集 地域で支える福祉のまちづくり

だれもが住みよいまちをめざして

わが国は、新しい世紀への突入とともに、さまざまな面で大きな転換期を迎えています。本格的となった少子高齢社会への対応も重要な課題の一つ。平成十二年にスタートした介護保険制度など、新しい福祉施策の在り方にも注目が集まります。

その一方、地域の人々が連携して支える福祉への期待も、ますます高まっています。市内各地区の「福祉のまち推進センター」は、地域で支え合う福祉活動の拠点。それぞれのセンターが、地域の将来を見据え、その実情に合わせたさまざまな活動を展開しながら、だれもが安心して暮らせるやさしいまちを目指して活動しています。

今回は、福祉のまち推進センターの活動を紹介しながら、地域で支える福祉を考えます。

福祉のまち推進センター

市では、少子高齢社会に対応するための指針として、平成七年に「地域福祉社会計画」を策定しました。その柱の一つが「福祉のまち推進センター」の設立。地域に住む人たちがお互いに助け合うことで、きめ細かな福祉を行っていくための組織づくりでした。

まず、区の社会福祉協議会に「区福祉のまち推進センター」が置かれました。そして、地域のみなさんの合意により、各地区ごとに「地区福祉のまち推進センター」が開設されていったのです。東区では、平成八年三月に元町地区福祉のまち推進センターが開設されたのを皮切りに、平成十二年三月までに、区内十地区のすべてに開設されました。

この福祉のまち推進センターを中心に、地元の町内会や商店街などの団体、民生委員、学校、住民などが

連携して、さまざまな福祉活動を展開しているのです。

地域で見守るやさしいまち

福祉のまち推進センターの大きな活動の一つは、独り暮らしの高齢者や障害のある方などを対象とした安否確認活動。そして、この活動を支えているのは、福祉推進員や協力員と呼ばれる地域のボランティアの皆さんです。

ボランティアは、訪問や声かけ照明が点灯しているか、郵便物がたまっていないかの状況から、独り暮らしの高齢者などの安否を確認したり、見守ったりしています。ときには、必要に応じて洗濯、掃除、買い物、ゴミ出しなどの軽易な家事を手伝うこともあるそうです。

しかし、活動に際しては、見守り対象者のプライバシー問題のほか、ボランティアや各団体の役割分担の調整など、配慮しなければならない



北光地区の安否確認・見守り活動。
「すぐ近くに頼れる人がいるのは安心」と話す仲ミネさん(80歳)(左)。趣味の油彩画の集まりなど、外出の機会も多いそうです。「普通の近所付き合いの延長のように自然体でやっています」と話すのは、ボランティアの武岡秋夫さん(64歳)(中央)。この日は地区福祉推進部会長の山本龍太郎さん(右)と一緒に訪問しました。